

“古代天皇の年代観に対する新視点”～中臣氏の系譜から見た「記紀の紀年論」～（会員番号 10066：米田 喜彦）

※：記紀などの史書には、「中臣氏」の一族（先祖）が登場します。「中臣氏」の系譜は、『古代豪族系図集覧』によって、  
\_\_：分かっていますので、この「系譜」を年代の物差しにして、古代天皇の謎（年代）に迫ってみようと思います。

- （その1）：（20世孫）中臣烏賊津（いかづ）使主（おみ）と、その父「巨狭山命」。「津守」の系譜と「多遲摩」の系譜。
- （その2）：（14世孫）伊賀津（いがづ）臣（おみ）命と、その子「梨迹臣命」。「魏志倭人伝」に出てくる「難升米」。
- （その3）：（9世孫）「天児屋命（天児屋根命）」。「天照大神」の「天の岩戸」に登場する「中臣氏」の遠祖。
- （その4）：（初代）一書と古事記に登場する、「天御中主尊」。「高天原（たかまのはら）」に生じた別（こと）天つ神。
- （その5）：（12世孫）「神武東征」と同時代の「中臣氏」。（伊勢の国は、天御中主尊の12世の孫の天日別が平定した所である。）

P-01：「要約」と「目次」

P-02：（藤原鎌足の生年から逆算した時の）中臣氏の系譜。（「初代」から12世孫まで）

P-03：（藤原鎌足の生年から逆算した時の）中臣氏の系譜。（13世孫から23世孫まで） / P-04：（24世孫から30世孫まで）

P-04：「梨迹臣命（NASITO-OMI）」＝「難升米（NANSYOU-ME）」＝「難斗米（NANTO-ME）」＝「那志登美（NASITOMI）」について。

P-05：『三国志魏書倭人伝』（東洋文庫：「東アジア民族史1」より）抜粋と、（考察）。

P-06：「津守氏の系図」（『古代豪族系図集覧』P-246：住吉神社神主家）に加筆すると、こんな姿が見えて来ました。

P-07：（考察）：（「津守」の系譜より、）「天之日矛」から「神功皇后」への流れ。

P-08：系図解説マニアが、（「ひこ」と「みみ」の観点から）「魏志倭人伝」を読みました。

P-09：神武東征（ニギハヤヒの東遷）に出てくる、「ひこ」と「みみ」。

P-10：（考察）：「貝の道」と「神武東征」（ニギハヤヒの東遷）。

P-11：「補足」：「女王・大王」と「男弟王」の支配体制。『多遲摩氏の系図』の「解説例」。ほか。

自称：「系図解説マニア」（座右の銘：矛盾の中に真実が隠れている。）

※：中臣氏（天神系）の系譜 『古代豪族系図集覧』P-3（神統譜・天神系）より  
（30歳の時に、次世代の子どもを産んだとした時の、大まかな生まれた年代の一覧表。）（藤原鎌足の生年から逆算）

(生年：概算)	(中臣氏の先祖)	(記紀・風土記などの記述)	(同時代の記事)
(BC250年生) (初代)	天御中主神	「 ←   天御中主神は、「高天原（たかまのはら）」に生じた別（こと）天つ神。   天御中主神の活躍は、徐福が活躍（移住）とほぼ同時期。   BC 209年、豊の69世孫・蘇伯孫が辰韓を建国したと言う。 ↓	
(BC220年生) ( __世孫)	天八下尊		
(BC190年生) ( __世孫)	天三下尊		
(BC160年生) ( 3世孫)	天合尊		
(BC130年生) ( 4世孫)	天八百日尊		
(BC100年生) ( 5世孫)	天八百万魂尊		
(BC70年生) ( 6世孫)	津速魂命	(BC57年、13歳の朴氏・赫居世が即位した、国号を「徐那伐」といった。)	
(BC40年生) ( 7世孫)	市千魂命		
(BC10年生) ( 8世孫)	居々登魂命（こごとむすび） （興登魂命）	『古代豪族系図集覧』 （忌部氏の系図より）	居々登魂命——— ( 9世孫)  ———天児屋根命 天背男命——— 居登能麻遲媛命——— (一書イザナキ) (天児屋根命母)
(020年生) ( 9世孫)	天児屋根命	(天の岩戸の話に登場) ←：「天照大神」の死亡は、1世紀の中頃か。	
(050年生) (10世孫)	天押雲命（天忍雲根命）		
(080年生) (11世孫)	天種子命	(神武天皇紀：甲寅114年)：天種子命は、菟狭津媛を妻にした。	
(110年生) (12世孫)	宇佐津臣命		
	：(風土記：伊勢国) 伊勢の国は、天御中主尊の12世の孫の「天日別」が平定した所である。		
	：(東洋文庫P-284より)：神倭磐余彦の天皇が、あの西の宮（日向）からこの東の洲（くに）を征討された時、云々。		

『先代旧事本紀』

天照大神——天押穗耳尊——饒速日尊——天香語山命（ニギハヤヒ尊の東遷に随伴）  
（推測：天御中主尊の12世の孫の「天日別」）

（140年生）（13世孫）御食津臣命

（170年生）（14世孫）伊賀津臣命

（風土記：近江の国・伊香の郡。「天羽衣」を盗んだ話。）  
（「夫婦同名」から、妻と思われる「伊賀津姫」は、伊賀の郡を領していた。）

（200年生）（15世孫）梨迹臣命

（230年生）（16世孫）神間勝命

（260年生）（17世孫）久志宇賀主命

（290年生）（18世孫）国摩大鹿嶋命

（母は天女の妹。梨迹臣命＝難升米、とすると、魏志倭人伝に登場。）  
（常陸国風土記：崇神天皇と神間勝命のやりとり。）  
（垂仁天皇紀）（天日槍の来帰は、垂仁天皇3年：274年：60年のズレ）  
（風土記逸文P-308より：垂仁天皇の27年戊午：358年：つちのえ-うま）

（320年生）（19世孫）巨狭山命（狭山命）

（350年生）（20世孫）雷（いかつち）大臣命

中臣烏賊津（いかつ）使主

（常陸国：倭武天皇のみ世に、天の大神が中臣臣狭山命に云々。）  
（神功皇后紀：中臣烏賊津使主を喚（よ）び、云々。）  
（神功皇后は、4世紀後半に活躍。太歳辛巳＝381年：かのと・み）

「古事記」より

菅竈由良度見  
（どみ）

葛城之高額比売

神功皇后

…  
（380年生）

応神天皇  
「膽香足姫命」

『古代豪族系図集覧』

（津守氏の系図より）

度美媛命  
中臣連祖巨狭山命

—  
—雷（いかつち）大臣命  
（20世孫）

←（推測）＝「五十日足彦王」  
←（推測）≠「かにめ雷王」

（380年生）（21世孫）大小橋命

（410年生）（22世孫）中臣阿麻毗舍

（440年生）（23世孫）阿毘古

(470 年生) (24 世孫) 真人

(P-04) ↓

(500 年生) (25 世孫) 鎌子 (黒田)

(欽明天皇紀 13 年 : 551 年 : 中臣鎌子は云々。)

(530 年生) (26 世孫) 常盤

(560 年生) (27 世孫) 可多能枯

(590 年生) (28 世孫) 御食子

※ : 「小野妹子」(蘇因高 : そいもこ)。(607 年、遣隋使)

(620 年生) (29 世孫) 藤原鎌足 (614 年生~669 年没)

※ : 「蘇伯孫」の 29 世孫「慶」は新羅の時代に

(・・年生) (30 世孫) 藤原不比等 (659 年生~720 年没)

\_\_ : 最高官職である上大等となった。(真徳女王時代の関川?)

※ : 「梨迹臣命 (NASITO-OMI)」 = 「難升米 (NANSYOU-ME)」 = 「難斗米 (NANTO-ME)」 = 「那志登美 (NASITOMI)」について。

※ : 風土記 (東洋文庫 P-304) 天女の妹の「天羽衣」を盗んだ男「伊香刀美」の話。

\_\_ : 風土記の話によると、「伊賀津臣命」は、近江の国で、天女の妹の「天羽衣」を盗んでいます。

※ : 風土記の人物である「伊香刀美 (いかとみ IKA-TOMI)」を調べると、系図集 (『古代豪族系図集覧』) で

\_\_ : 中臣氏の系譜に出てくる「伊賀津臣命 (いがつおみ IGA-TUOMI)」と同一人物であることに気が付きました。

\_\_ : 子どもを調べると、「那志登美」と「梨迹臣命」の名前が、一致し、「意美志留」と「臣知人命」の名前が一致します。

※ : 魏志倭人伝の大夫「難升米」は、日本書紀 (神功皇后紀) では、「難斗米」になっています。

\_\_ : 「難斗米」を「なしとめ」と読むとき、「那志登美 (なしとみ)」と「同一人物」であるように思えます。

(IKA-TOMI)

(OMISIRU)

(OMISIRU-HITO-)

(父) 伊香刀美 — | — (兄) 意美志留 (中臣氏 : 臣知人命) ← : (推測) 「後漢書韓伝」の「臣智」(地位を表す言葉)

(伊賀津臣命) | — (弟) 那志登美 (中臣氏 : 梨迹臣命) ← : 「難升米」 = 「難斗米」 = 「那志登美」

(IGA-TU-OMI) | — (姉) 伊是理比売 (NASITO-OMI) (NANSYOU-ME) (NANTO-ME) (NASITOMI)

(母) 天女の妹 — | — (妹) 奈是理比売 (中臣氏系図) (倭人伝) (神功皇后紀) (風土記)

※：『三国志魏書倭人伝』（東洋文庫：「東アジア民族史1」より）抜粋

---

：その年の12月、〔明帝は〕詔書を出し、倭の女王に伝えるため〔次のように〕言った。  
：〔汝を〕親魏倭王卑弥呼に任命する。帯方〔郡〕太守劉夏が使者を遣わし、汝の大夫「難升米」と次使「都市牛利」を  
：送った。云々。〔その苦勞をみとめ〕「難升米」を率善中郎将、「牛利」を率善校尉とし、銀印青綬を与えた。  
：〔正始〕4年（243）に、倭王はふたたび大夫伊声耆と掖邪狗ら8人の使節を送り、云々。その6年（245）には、  
：〔齊王は〕詔して、倭の難升米に黄幢（おうどう）を与えることにし、〔帯方〕郡に託して授けた。  
：〔正始〕8年（247）、〔帯方郡の〕太守（長官）王頎が新たに任官されると、  
：倭の女王卑弥呼は、もともとから狗奴国の男王卑弥弓呼と不和であったので、倭の載斯烏越らを  
：遣わして〔帯方〕郡に行かせ、〔狗奴国と〕戦っている様子を報告した。  
：〔そこで太守王頎は〕塞曹掾史張政らを遣わして、彼らにさきの詔書と黄幢を持って行かせ、  
：難升米に授け、正式な文書をもって卑弥呼に〔魏の立場を〕告げ諭（さと）した。

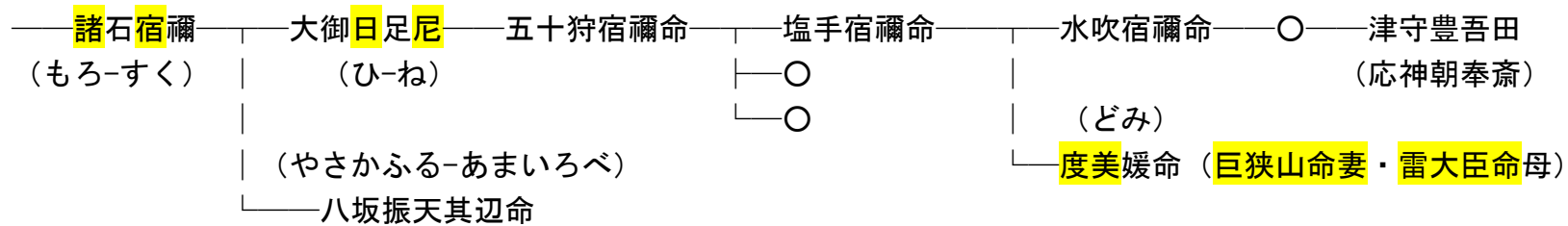
---

※：251年頃（前後）の倭国は、女王卑弥呼・台与など、女王が治める国でした。その中で、  
\_\_：245年に、「魏」が、男王として、国を治めるのにふさわしいとした人物は、「難升米」でした。  
\_\_：この人物は、「中臣氏」の先祖を調べると「梨迹臣命」が、該当するよう見えます。さらに、大事な点は、  
\_\_：「後漢書韓伝」によると、もろもろの小さな別村には、渠帥（首長）がおり、〔そのうち〕強大なものを「臣智」といい、云々。  
\_\_：つまり、（兄）「臣知人命」は、韓の「臣智」ではないか、ということです。つまり、近江で生まれ育った兄弟の内、  
\_\_：兄は、韓の「臣智」で、弟は、魏に認められて、女王国の支配を任されることになった、と考えられることです。

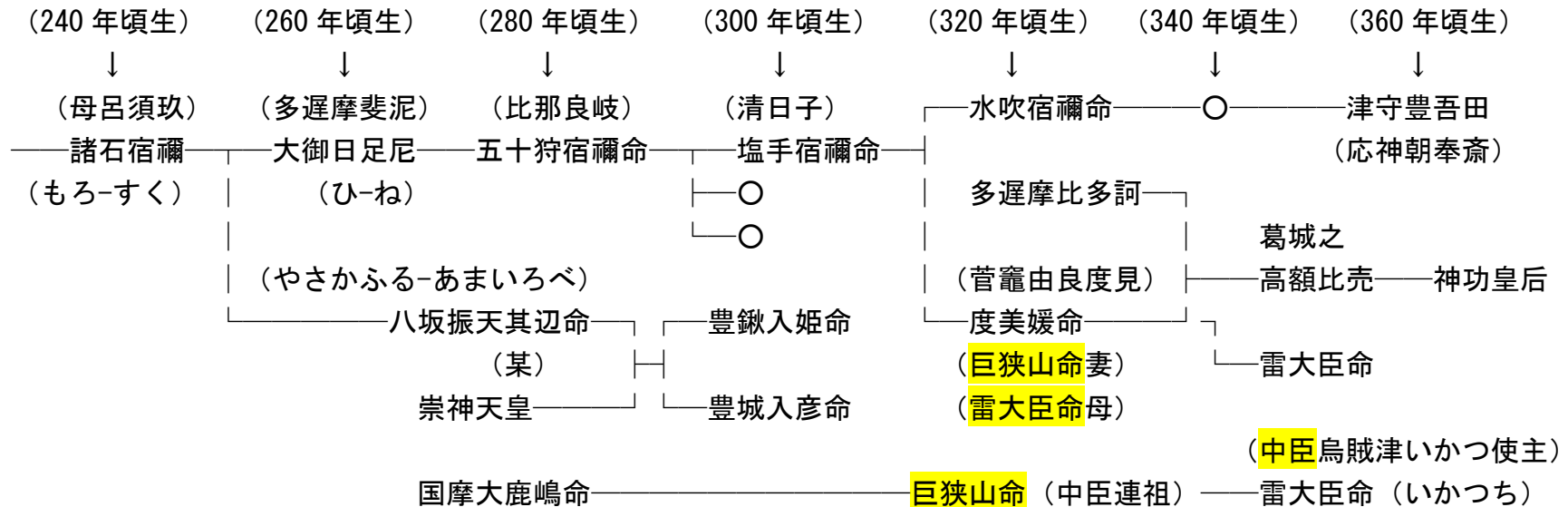
※：女王国を私は「九州国」だと考えていますが、近江（東倭）出身の「難升米（梨迹臣命）」が、女王国（九州島）を  
\_\_：（実質）支配することに、反対する勢力がありました。それが、（帥升の子孫と思われる卑弥弓呼の）狗奴国でした。

※：248年頃に亡くなった「女王・卑弥呼」が、どこに住んでいたかは、不明です。

※：「津守氏の系図」（『古代豪族系図集覧』P-246：住吉神社神主家）に加筆すると、こんな姿が見えて来ました。



※：上記の「津守氏」の系図に、「夫」や「多遲摩系の名前」や「神功皇后」を書き入れると、下図の系図になります。



(古事記より)

：一天之日矛 — もろすく — ひね — ひならき — きよひこ — 菅竈由良度見 — 葛城之 — 高額比売 — 神功皇后

※：系図の中に、 諸石宿禰（もろいしのすくね） ⇒（もろすく） ⇒母呂須玖（P-07）  
 \_\_：多遲摩系の名前を 大御日足尼（おおみひのすくね） ⇒（ひね） ⇒多遲摩斐泥  
 \_\_：見つけました。 度美媛命（どみひめのみこと） ⇒（すがかまゆらどみ） ⇒菅竈由良度見

※：神功皇后は、(380年に応神天皇を生んでいますから、) だいたい360年頃に生まれています。  
 \_\_：そうすると、神功皇后の祖母(菅竈由良度見)は、320年頃に生まれたのではないかと考えられます。  
 ※：この系図に限っては、(女性中心で考えて、) ひと世代20年で、さかのぼってみますと、  
 \_\_：諸石宿禰(母呂須玖)は、240年頃に生まれたこととなります。  
 \_\_：天之日矛(天日槍)は、「母呂須玖(もろすく)」の父親ですから、240年頃に子を生んでいます。

※：そうすると、何が考えられるかといいますと、天之日矛は、「母呂須玖(もろすく)」と一緒に、  
 \_\_：塞曹掾史張政と一緒に倭国にやって来た。そして、265年に、一度、塞曹掾史張政と一緒に、韓国に戻った。  
 \_\_：そして、(60年ずらしの) 垂仁天皇3年(274年)に、天日槍は、来帰した(帰って来た)。(「来帰」は、岩波文庫の原文)  
 ※：これで、(系図の問題は別にして、) 天之日矛(天日槍)の「年代的な謎」は、解けたと思います。

※：中臣氏の系譜を崇神天皇の関係。「14世孫・伊賀津臣命」の「ひ孫：17世孫・古加斐命」は、崇神朝に活動している。

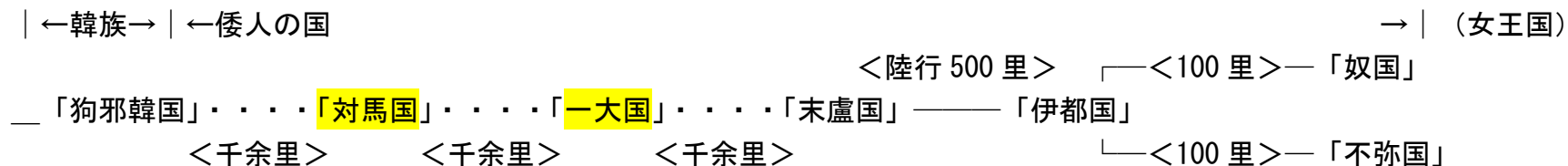
(伊賀津臣命) ┌── (兄) 意美志留 (中臣氏：臣知人命：伊香連祖) ←：『古代豪族系図集覧』  
 (父) 伊香刀美 ┌── (弟) 那志登美 (梨迹臣命=難斗米)  
 └── (姉) 伊是理比売  
 (母) 天女の妹 ┌── (妹) 奈是理比売 ←：「風土記逸文」伊香連の先祖 ←：(出典によって、先祖が違う例。)

※：(風土記逸文)より 次女の名は、奈是理比売、これは、伊香連(いかごのむらじ)の先祖である。

※：『古代豪族系図集覧』P-340、「伊香具(いかご)」

—伊賀津臣命—臣知人命—角豆命—古加斐命(崇神朝奉伊香具神)—白猪主命

※：系図解読マニアが、「ひこ」と「みみ」の観点から「魏志倭人伝」を読みました。



<「官名」>

大官	卑狗 (ひこ)	(ひこ)	———	じき	じこば / たも
次官	(ひなもり)	(ひなもり)	———	〇〇/〇〇	(ひなもり) / (ひなもり)

400 余里四方      300 余里四方      投馬国 (長官：みみ、次官：みみたり)。  
 (400+400)      (300+300)      邪馬壹国 (長官：いしま、次官：弥馬升ほか)

※：7000+1000+ (400+400) +1000+ (300+300) +1000+500+100=12000 (里)

長官「みみ」・・・・「投馬国 (とうま)」。

長官「ひこ」・・・・「対馬国 (つしま)」・「一大国 (壱岐いき)」。

次官「ひなもり」・・・・「対馬国」・「一大国」・「奴国」・「不弥国」。(鄙ひな：都から離れた土地)

(景行天皇紀)

(「みみ」系)・・・・「天之忍穗耳」「手研耳命」「綏靖 (神ぬ名川耳天皇)」、出嶋 (いずし) の人「太耳」、(宇佐)「耳垂」

(「ひこ」系)・・・・「天稚彦」「大彦」「彦座生・日子座王」

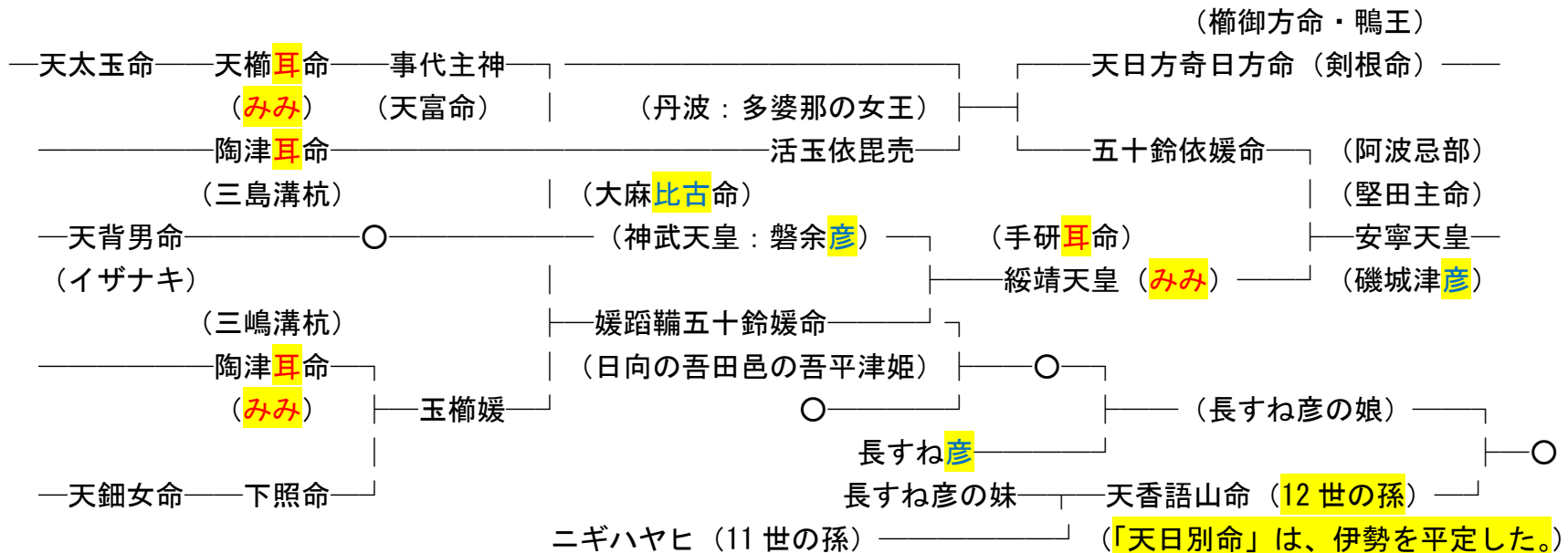
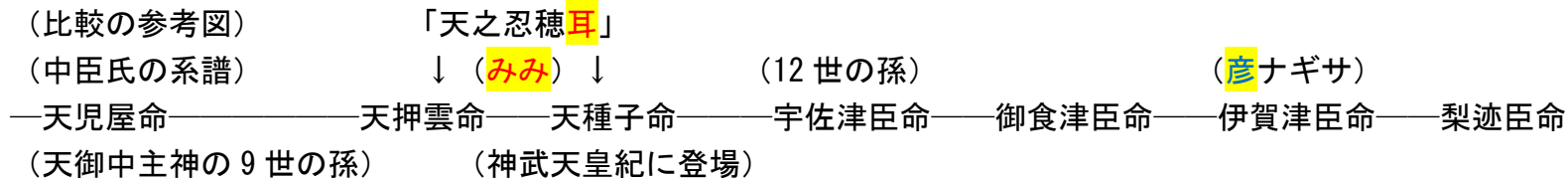
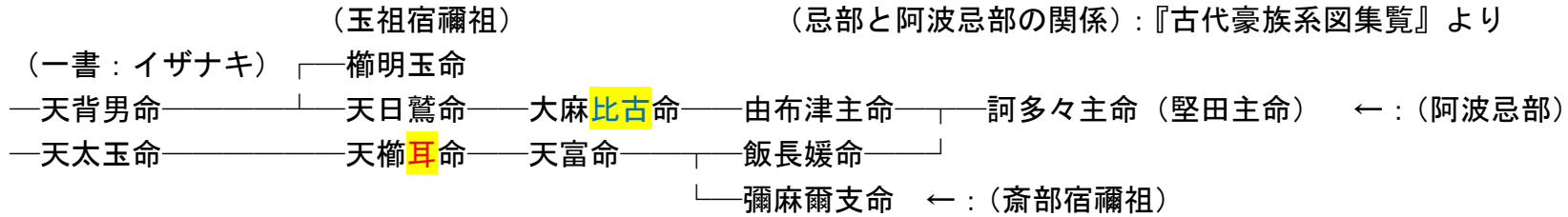
(「ひなもり」系)・・・・(景行天皇紀)「兄夷守 (ひなもり)」「弟夷守 (ひなもり)」

ここから、何か見えてこないか、思案中です。たとえば、「みみ」系の豪族は、没落したとか・・・。



※：神武東征（ニギハヤヒの東遷）に出てくる、「ひこ」と「みみ」。

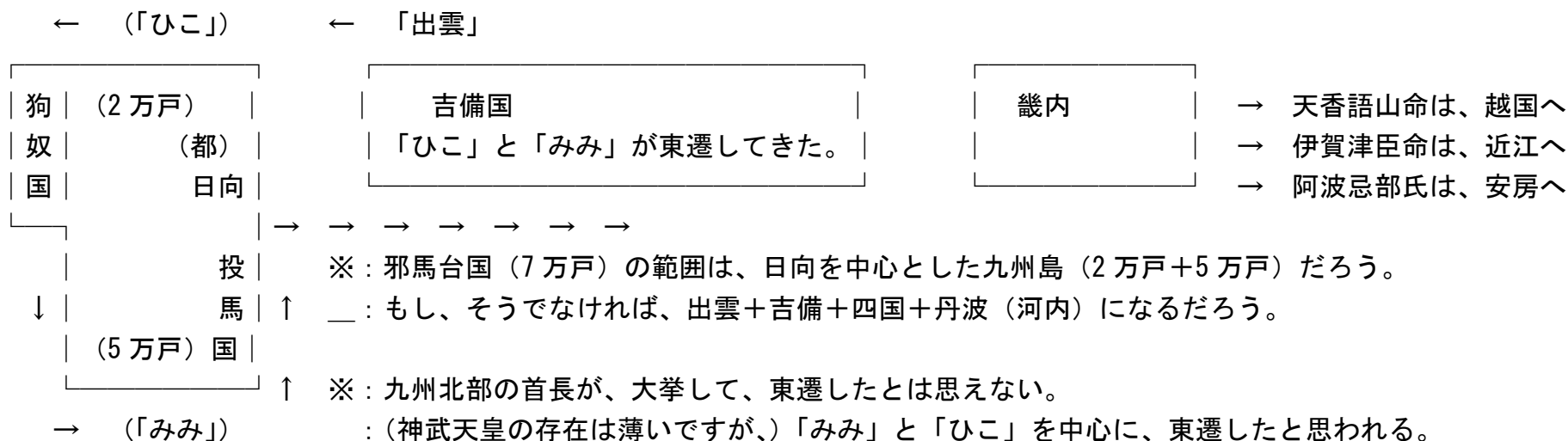
(P-09)



※：「貝の道（ゴホウラなど）」に合わせた、「神武東征」の図（「日向・都」を「宮処」とした、「九州島＝ヤマト」論）

※：「ひこ・みみ」は、長官ですから、例えば、（出雲を高天原として）「みみ」を任命（指名）したとすると、

\_\_：（出雲から）九州島を「反時計回り」に、任地に赴くと考えられます。北部九州は、スルー（通過）しただけになります。



※：女王国の女王は、「王」を名乗れる。として、

※：「王」は、勝手に自称出来ないとする、と、「狗奴国」の王は、「帥升」の子孫と思われる。

※：「神武天皇の東征／ニギハヤヒの東遷」は、（斎部氏の祖）事代主神（天富命）が中心になって行われたと思います。

\_\_：「大神・みわ」（三輪山）は、おそらく「事代主命（迦毛大御神：カモノオオミカミ）」を祭っていると思います。

\_\_：7・8世紀の「天皇（天智・天武）」は、「事代主命（天富命）」の子孫である「景行天皇」の子孫と考えています。

※：天孫降臨の「いつとものお（五伴緒／五部の神）」の子孫たちは、天皇家以外は、だんだんと没落していきませんが、

\_\_：阿波と安房に（昔のまま、）残った「天背男命（一書：イザナキ）」の子孫は、「阿波忌部氏」になると考えられます。

※：(風土記逸文：P-283)：(伊賀の国) この名は、伊賀津姫の領していた郡であるから、それによって郡の名とし、  
：また国の名としたものである。(おそらく、「伊賀津姫」＝「天女の妹」、だと思います。)

(領主が女性である「例」。)：(P-76)：私は服部弥蘇連が因幡の国造「阿良佐加比売」と結婚して生んだ子、云々。

：(P-84)：都麻とよぶわけは、「播磨刀売」と「丹波刀売」とが国の境界をきめたとき、云々。

※：『続日本紀』《延暦九年（790年）七月辛巳》に、次のような記述があります。

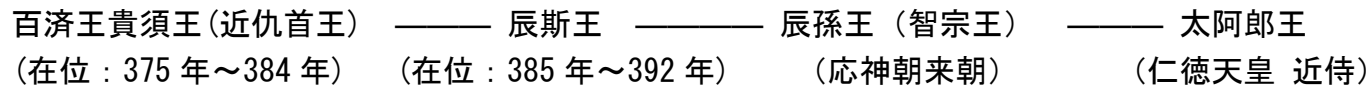
：御宇応神天皇。命上毛野氏遠祖荒田別。使於百濟搜聘有識者。国主貴須王恭奉使旨。採宗族。

：遣其孫辰孫王（一名智宗王）随使入朝。天皇嘉焉。特加寵命。以為皇太子之師矣。於是。始伝書籍。

：大闡儒風。文教之興。誠在於此。難波高津朝御宇仁徳天皇。以辰孫王長子太阿郎王為近侍。

※：神功皇后の「年代観」について。『古代豪族系図集覧』P-112より（葛井・船の系図）

\_\_：上記のことから、ひとつの年代（応神天皇 380年生）が、(ほぼ)確定されます。



※：下図のような「支配体制」をどう呼ぶか、考えています。：『多遲摩氏の系図』の「解説例」（「夫婦同名」という考え方）

